台湾で活躍した「魅力ある日本人」の教材化

前高雄日本人学校　教諭
長崎大学教育学部附属小学校　教諭　中　村　俊　一

キーワード：魅力ある日本人、八田與一、山岡栄、先人の営み、教材化

１．はじめに

言葉や文化に違いはあるものの、親日的な台湾の人々。実際に３年間暮らしてみて、このことを強く実感した。多くの台湾の人から感じる共通項は「人を大切にする」ことであり、特に、日本人に対しては特別なものがあるように感じる。何事かあれば我が事のように親身になって対応し、解決へと導いてくれる。

こうしたことの背景には、日本統治時代における先人の営みが大きいと思う。例えば、巨大なダムの建設や道路等の都市計画、インフラの整備など、現在の台湾の発展につながる先人の営みが数多く存在し、そのことに感謝の気持ちを抱く台湾の人は少なくない。先人の功績は、現在もなお子から孫へと受け継がれている。

そう考えると、統治時代における先人の功績を調査・追究し、事実を基に、教材化を図ることは意義深く、先人の営みを子どもたちに分かりやすく伝えることは、在外教育施設にいるからこそできる価値だと言える。

教材化を通して得られる確かな知と先人の営みの大きさに気付いた子どもたちは、感動を覚え、そう遠くない将来、きっと、日台のかけ橋となり得る人材へと成長するであろう。

今回、台湾で活躍した「魅力ある日本人」として、２人の人物「山岡（やまおか）　栄（さかえ）」と「八田（はった）　與一（よいち）」を取り上げ、教材化を行った。２人に共通することは、日本統治時代に「台湾のひと」を大切に、そして、その人たちのために尽力し、未だにその功績が語り草になっていることである。

では、２人がどんな営みを行い、多くの「台湾のひと」に感謝され続けているのか。また、私がどのような視点で教材化を図ったのか。そうしたところを焦点化し、話を展開していく。

２．台湾で活躍した「魅力ある日本人」

(1)「山岡　栄（さかえ）」の教材化

山岡　栄について、現地調査したことを基に、以下のような学習展開案（TP 案）を作成した。Tは、教師の発問や教材【学習材】提示に関することであり、Pは、予想される子どもの反応である。

教師（T）と子ども（P）のやりとりを通して、山岡　栄の功績とその価値に迫る 45 分間である。

『山岡　栄を教材化した学習展開案』

T　学習材１を提示。【学習材１（写真）：山岡先生の慰霊碑に集う人々】

T　写真を基に、気付いたことや思ったことを発言するように伝える。

P　お墓参りをしていると思います。八田與一さんのお墓かな？

P　お盆の時のお墓参りか、何かの供養をしているのだと思います。

T　学習材２を提示。【学習材２（写真）：慰霊碑（アップ写真）を提示】

P　たくさんの花が飾られています。顔写真が置いてあります。

P　横断幕に書かれている「殉職」って、どういう意味だろう？　山岡って書いてあるよ。

T　ここ（写真の場所）は、どこだと思いますか。

P　台湾のお墓は、そんなに石塔が高くないから、ここは、日本だと思います。

「慰霊碑」

T　実は、ここは高雄から約２時間のところにあります。

P　なるほど、台湾か！

P　２時間なら、沖縄（日本のどこか）かもしれないよ。

T　ここは、台湾の台中にあるのです。実は、先週の土曜日に先生は、ここへ行って来ました。

※台湾の地図を提示し、位置の確認を行うようにする。高雄と比較的近い距離にあることを確認する。

T　先生は、山岡　栄先生という「ひと」について、調べてきたのです。

【学習材３：山岡先生の顔写真】を提示。

P　若い先生だな。どんな人なのかな？

T　84周年 にスポットをあてる。（慰霊祭の写真を提示：写真内の横断幕で確認できることを伝える。）

P　84年前に何が起こったの？

T　【学習材４：当時の新聞記事（日本版と台湾版）】を提示。

※新聞記事に記載されている活字を手がかりに、子どもたちは、事実に迫ることができるであろう。

T　84年前、ここで何が起きたのか、気になるね。今から話しますね。（子どもの予想を聞いてもよい場面）

※ここで、山岡先生が命をかけ、子どもたちのために尽力したことを語るようにする。

T　【学習材５：現在（84年後）の川の様子】　※イメージをもつための補助資料

【読み物資料】

山岡先生は、1902年に愛媛県の伊予郡中山町で生まれました。1930年の４月に台湾に渡り、農林国民学校で子どもたちの指導にあたります。教育愛に燃える山岡先生は、一人ひとりの生徒に熱くかかわったそうです。

５月９日の朝、豪雨で川は増水し、同渓中に架けた橋は流失しました。その時、教え子たちが、川に取り残され、生命の危険が迫っていることを山岡先生は知ります。そこで、同僚と共に現場へかけつけました。濁流に呑み込まれようとする教え子たちを見た山岡先生は、我が身の危険を忘れて、濁流に飛び込み、一人で救助に向かいます。しかし、川は150㎝以上も増水しており、さらに、渦を巻いていました。泳ぎが得意な山岡先生でしたが、激流に足をとられ、のみ込まれてしまいます。

山岡先生の遺体は、この場所から約2.5㎞も離れた下流で見つかることとなりました。

T　【学習材６：山岡家の家系図】を提示。（学習材１と関連付けて提示。）

T　山岡先生には、妻と子どもがいたことを伝え、その子孫が愛媛県にて健在であることを伝える。

P　今もなお親族の人が訪れるということは、慰霊を行う台湾の人々に感謝しているのだと思います。

P　台湾の人もこの出来事を先祖から聞き、今も山岡先生のことを大切にしているのだと思います。

T　84年前に起きたこの出来事を今も地域の方々は大切に思い、この慰霊碑の前で手を合わせるのですね。

T　この事実を知って、あなたは、どう思いましたか。（何を感じましたか。）

※ワークシートの配付（「山岡　栄という魅力ある日本人」）と向き合う時間を設定する。）

P　自分の命を捨ててまで、子どもたちの命を救うなんて勇気があると思います。（実際の感想）

P　日本人なのに台湾人の生徒を助けたことが、私は、すごいなあと思いました。（実際の感想）

T　実はね、日本人でありながら、台湾の人々のために力を注いだ人が他にもいるのですよ。（「八田與一と烏山頭ダム」の学習につながる終わり方となるようにする。）

T　４年生の総合的な学習の時間では、台湾の「ひと・もの・こと」に目を向け、学習していきますよ。

(2) 八田與一と烏山頭ダムの学習を通して

日本統治時代、不毛の土地と呼ばれ、灌漑整備が不十分であった台湾南部の嘉南平原は、10年の歳月を経て、土木技師である八田與一の手によって緑の大地へと生まれ変わる。烏山頭ダムの完成にかかった費用は、当時の金額で破格の5400万円。ダムの規模は、有効貯水量１億5000万㎥という当時としては最大級である。

ダムの恩恵を受け、未だに感謝の思いを抱く「台湾のひと」も多く、ダムから少し離れた寺院（廟）の２階フ

ロアには、八田與一の功績を称える展示物が常設されている。

広大なダムの他にも八田與一の銅像や殉工碑（ダム工事において亡くなった方を慰霊する碑）、余水吐など、ダムに関わる歴史的遺構も数多く存在する。しかし、それらを目の当たりにしてもその背景にある「ひと」の営み（知識）を知らなければ、学びの深まりは期待できない。そこで、学習のゴールを現地調査（見学）と設定し、子どもたち一人一人が歴史的遺構に対する歴史的価値を認識し、実感することができるように、事前学習において確かな知を得ることができるような場を設定した。

①ダムの全景を見つめる前に

・セミ＝ハイドロリックフィル工法 …… 八田與一は、地震が多い地形であることを踏まえた上で、コンクリートを極力使用しない工法を採用した。土砂がダム内に溜まりにくい利点もあり、現在も十分稼働している。

・余水吐の設置 …… 60 個の排水口となだらかな傾斜で、大雨の際も自然に排水することができる仕組みである。

※上記の構造を知った上でダムの全景を目の当たりにした子どもたち。そのつぶやきに耳を傾けると、

「足元に広がる堤防。この下にはコンクリートが埋め込まれている。自然に配慮したつくりなんだね。」

「余水吐は、ただの機械的な穴ではなく、災害を防ぐ目的で、人の命を守るためにつくられているのか」

※スケールの大きなダムとは対照的に、きめ細やかなダムのつくりに感嘆の声をあげる子どもたち。

②殉工碑に刻まれた名前を見つめる前に

・殉工碑には、ダム建設中に亡くなった作業員とその家族、計 134 名の名前が刻まれている。

注目すべきは、その名前が台湾人と日本人の区別なく、亡くなった順番に記されていることである。日本統治時代において、日本人第一主義という風潮がある中、明確な区別の下、日本人の名が碑の上位に刻まれることも考えられる。しかしながら、亡くなった順番に着目すると、八田與一の人柄が浮かび上がってくる。

つまり、作業に関わる台湾人と日本人に対して分け隔てなく接し、平等に扱った何よりの証である。

※こうした知識を有した状態で殉工碑を見学した子どもたちは、刻まれた名前の順番に注目し、事前学習で得た知と事実を照らし合わせ、八田與一の人柄を強く実感することとなった。

③八田與一の銅像と対面する前に

・八田與一は、ダム建設に携わる人々のために集落をつくり、その中に学校や憩いの場などを設け、自らの家族と同じように、作業員とその家族も大切にした。

・作業員がマラリアに感染しないように、予防するための高額な薬を購入し、作業員に分け与えた。

・関東大震災の影響で工事の予算が大幅にカットされたとき、有能な人材から順に解雇した。その理由は、有能な人物には、すぐに働き口が見つかるから。守るべきは、現場で働く弱い立場の人々と捉えた。

一方で、予算が回復すると、一度解雇した作業員を再雇用している。

※このような八田與一の「ひと」としての魅力にふれた子どもたち。そんな子どもたちと授業の中で、次のようなやりとりを行った。

「八田與一の銅像と子どもたち」

T　※八田與一の銅像を訪れ、現地調査（施設見学）することを子どもたちに伝える。

P　現地調査では、八田さんの銅像に花を添えたいです。

P　八田さんの銅像をみんなできれいに磨きたいです。清掃したいです。

T　それは、君たちの先輩や多くの人々が、そうしているから同じようにやりたいのではないのですか。

P　いいえ。違います。

P　私たちは、八田さんに感謝の気持ちを伝えたいのです。

T　でも、八田さんが直接、君たちに何かをしたわけではないですよね。どうして感謝なのですか。

P　もちろんそうです。でも、私たちは、八田さんが当時の台湾の人たちのために行ったことに感動しました。そして、そのことに感謝の気持ちを伝えたいのです。だから、花を添え、掃除をしたいのです。

※子どもたちの本心を知りつつも教師が子どもの心にゆさぶりをかけることで、子どもたちの本心を言葉で引き出すことができた。

３．おわりに

高雄日本人学校に赴任するまでは、八田與一に関する知識は、「巨大なダムを建設した日本人」。山岡 栄については、全くの無知であった。今回、縁あって台湾に住む機会を得て、そのことをきっかけに２人の業績を知り、興味・関心を基に、調査・追究活動を行うことを通して、その魅力に気付くことができた。

目の前に広がる風景もその背景にある「ひと」の営みを知らなければ、「美しい」「広大」などの言葉で締めくくられてしまう。しかし、そのことに関連する知が加わることで、人は、ものの見方に変化が生じ、さらには、「ひと」の営みに感謝する気持ちが芽生え、その思いを姿・形に表す行動も生まれてくる。

台湾で活躍した「魅力ある日本人」の教材化というテーマで調査・追究し、教材化を行ったが、きっと、子どもたちの心にも「先人が、何を大切に考え、なぜ、そのように尽力したのか」、こうしたことが深く刻まれ、先人の営みについて、じっくり考えるきっかけになったと振り返る。

以上のような経験を踏まえて、私は、これから出会う子どもたちとも「もの・こと」の背景にある「ひと」の営みに目を向け、そこから芽生える思いを大切に、そして、感謝の気持ちを姿・形で表していきたい。

異国の地で過ごした日々。その中で、先人の営みにふれ、そして、子どもたちとのやりとりを通して、自らの日本人らしさが磨かれたように感じる。

研ぎ済まされたこの感覚を今後も大切にしていきたい。